

FLORA KANAGAWA

Nov. 9. 2010 No.71

神奈川県植物誌調査会ニュース第 71 号

〒 250-0031 小田原市入生田 499 神奈川県立生命の星・地球博物館内
神奈川県植物誌調査会
TEL 0465-21-1515 ・ FAX 0465-23-8846
<http://nh.kanagawa-museum.jp/~kana-syoku/>
e-mail kana-syoku@nh.kanagawa-museum.jp



ミズユキノシタ:2010年10月24日(三浦郡葉山町 勝山輝男 撮影)。本文 863 頁参照。

目次

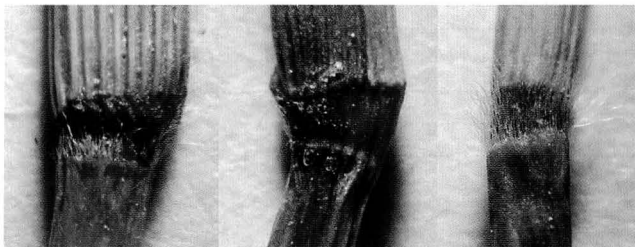
勝山輝男：神奈川県にミヤマササガヤがあった	860
久江信雄：(ニセ) コクモウクジャク続報	861
秋山幸也：相模原市内でウスヒメワラビを確認	861
秋山幸也：ガクナンというランを見た	862
林 辰雄：栄区・戸塚区でヤセウツボを記録	863
勝山輝男：ミズユキノシタの再発見	863
田中徳久・勝山輝男・大西 亘：相模川河川敷の水草の記録	864
林 辰雄：ミズキンバイ柏尾川に復活	865
事務局より	866
編集後記	866

神奈川県にミヤマササガヤがあった (勝山輝男)

ミヤマササガヤ *Microstegium nudum* (Trin.) A. Camus は、長田 (1989) によると、本州中部以南に分布し、周辺地域の植物誌では、静岡県植物誌 (杉本, 1984) に伊豆半島、愛鷹山 (須津川)、長野県植物誌 (長野県植物誌編纂委員会編, 2000) に南木曾の分布が記録されているが、神奈川県からは記録がなかった。今回、生命の星・地球博物館 (KPM) の標本から神奈川県産のミヤマササガヤと思われる標本を見出したので、経緯とその区別点も含めて報告しておく。

徳島県立博物館の茨木 靖氏 (調査会会員でもある) から、私が 2008 年 10 月 4 日に静岡県愛鷹山の須津川 (標高約 600 m) で撮影したササガヤの写真について、全体の雰囲気がササガヤと異なり、節にも毛があるので、ミヤマササガヤの可能性がないか、との指摘があった。しかし、ササガヤ *Microstegium japonicum* (Miq.) Koidz. var. *japonicum* は節が無毛であるが、変種のキタササガヤ var. *boreale* (Ohwi) Ohwi の節には毛があるので、節の毛の有無だけではミヤマササガヤとはいえない。

これらの種を含むアシボソ属は 1 節に 2 個ずつ小穂をつけ、1 つは長い柄があり、もう 1 つは短い柄をもつ。長田 (1989) ではミヤマササガヤの特徴として、節が有毛なほか、短柄小穂にほとんど柄がないこと、護穎の芒が 15 ~ 20mm と長いこと、基部の葉もあまり小さくならないことなどがあげられている。上記愛鷹山の写真の植物は、短柄小穂に柄が有るような、無いような、はっきりとせず、この程度は「ほとんど柄がない」と言えるのだろうか、と判断に困った。そこで、生命の星・地球博物館のササガヤ、キタササガヤ、ミヤマササガヤの標本を見直してみた。これが、



節 (左からミヤマササガヤ KPM-NA0000468, ササガヤ KPM-NA0105376, キタササガヤ KPM-NA0134679)。

神奈川県産のミヤマササガヤ発見のきっかけである。

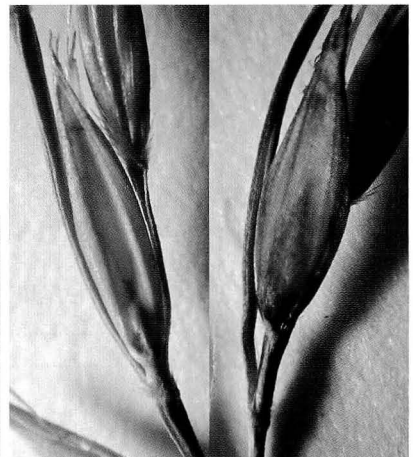
生命の星・地球博物館にミヤマササガヤとして収められていた標本は、高知県物部村のもの、紀伊半島の尾鷲の 2 点だけであった。2 点とも短柄小穂の柄ははっきりせず、節の毛は伏した短毛、芒は長いものは 20mm に達し、長田 (1989) の記述に良くあった。ただし、基部の葉は多少は小さくなるが、区別点にはなりそうもなかった。

キタササガヤの標本は岐阜県白鳥町と那須、屋久島小杉谷のものがあつた。岐阜県白鳥町と那須の 2 点は、節に斜上する長毛があり、短柄小穂の柄もはっきりとしていて、キタササガヤで間違いなさそうであつた。屋久島小杉谷の 1 点は、節に長毛があり、キタササガヤと思われるが、全体に著しく小さく、屋久島特有の矮小型であつた。これらの標本の芒はいずれも長さ 10mm 程度であつた。

ササガヤの標本は、『神植誌 88』『神植誌 01』のための調査で集められたものも含めて 100 点近くあつた。ほとんどは節が無毛で、短柄小穂の柄もはっきりしていて、ササガヤで問題はなかった。稀に短柄小穂の柄がやや短く、ミヤマササガヤとの区別に迷うものもあつたが、節が無毛なので、ササガヤと同定した。

ササガヤの束に入っていた標本のうち、箱根と奥湯河原で 1957 年 11 月に西尾和子さんが採集したもの 3 点は、節に伏した短毛があり、短柄小穂の柄がほとんどないものであつた。この 3 点については、護穎の芒も長く、ミヤマササガヤと判断した。

『神植誌 01』ではミヤマサ



短柄小穂 (左がミヤマササガヤ KPM-NA0000468, 右がササガヤ KPM-NA0105376)。

サガヤは取り上げられていないが、伊豆半島や愛鷹山に分布するので、神奈川県でも奥湯河原～箱根の県境界あたりに分布していても不思議ではない。奥湯河原で再発見に努めたい。

なお、サンプル数が少ないが、キタササガヤの節の毛は斜上する長毛な点でミヤマササガヤのものとは異なることが明らかになった。ササガヤやキタササガヤの短柄小穂の柄は短いながらも明瞭であるが、稀にやや短いものがある、迷うこともある。その場合にも、節の毛が無毛であれば、ササガヤ、斜上する長毛があればキタササガヤ、伏した短毛があれば、ミヤマササガヤと判断できそうである。ちなみに、愛鷹山の写真の植物は、節の毛は伏した短毛で、短柄小穂の柄もはっきりしないので、ミヤマササガヤと結論できた。

標本：ミヤマササガヤ 奥湯河原 西尾和子 1957.11.3 KPM-NA0000468, 箱根 西尾和子 1957.11.17 KPM-NA0000466 & KPM-NA0000467.

(ニセ) コクモウクジャク続報

(久江信雄)

本誌 69 号 (久江, 2009) に、愛甲郡愛川町上三増で見出したコクモウクジャクまたはニセコクモウクジャクと思われるシダについて報告した。2010 年 7 月上旬の珍しく梅雨晴れとなった日に、現地を再訪してきた。今回、数枚の新葉の内の 1 枚がこれまでより大きな葉を展開していた。期待しながら葉を裏返してみると、案の定、見事なソーラスをつけていた。発見してから 1 年 4 ヶ月、待ちに待った瞬間だった。ソーラスは長楕円形とやや長い線形のもの混在し、裂片の縁と中肋の間についていた。ニセコクモウクジャクのソーラスは、長楕円形で裂片の縁近くにつくので、問題のシダはコクモウクジャク *Diplazium virescens* Kunze var. *virescens* であることが確定した。

青木(1990)、『神植誌 01』、『神奈川県レッドデータ生物調査報告書 2006』によれば、コクモウクジャクの分布は県内では極めて稀で、逗子市の 1 調査メッシュの 2 ヶ所で記録されているのみであることから、今回の発見はコクモウクジャクの北限新分布と思われる。

なお、報告にあたり、葉の全体と下部羽片の写真を田中一雄氏にお送りし、同定をお願いしたところ、コクモウクジャクであるとの回答を頂きました。ありがとうございました。

標本：愛甲郡愛川町上三増 久江信雄 2010.7.8 KPM-NA0136942.

引用文献

青木清勝, 1990. コクモウクジャクの新北限地, シダ報, 2(83, 84): 4.

久江信雄, 2009. (ニセ) コクモウクジャク? . Flora Kanagawa, (69): 838-839.



コクモウクジャク (愛甲郡愛川町上三増 2010 年 7 月 8 日 久江信雄 撮影)。

相模原市内でウスヒメワラビを確認

(秋山幸也)

相模原市緑区沢井 (旧藤野町) においてウスヒメワラビ *Acystopteris japonica* (Luer.) Nakai を確認したので報告する。

2010 年 9 月 15 日、酷暑も峠を越して調査日和の薄曇りの中、沢井の山道を歩き始めた。沢を越えて林業用作業道を行くと、同行の菅沼広美さんがシダの群生の前で立ち止まり、宮崎卓さんへ「何度も見ているようなシダなのですが…これはなんですか？」と尋ねた。ちなみに宮崎さんは、ひどい腰痛で野外調査を自粛されていたのが、ようやく山道を歩けるほどに回復し、久しぶりに参加して下さっていた。腰に時限爆弾を抱えている宮崎さんは、のげざらないようリアクションを抑えつつ「えーっ！これはまだ 1 度も出て来ていないシダだと思いますよ！！」と驚きの声をあげた。



ウスヒメワラビ (相模原市緑区沢井 2010年9月15日 秋山幸也 撮影)。

生育地はスギの植林地の作業用道路沿いで、最初に見た場所に数株ほど、道沿いに少し登ったところにまた数株程度が点々と生育していた。残念ながら秋山は、現場でその有難味をよく理解していなかったの、注意深く生育状況を記録してこなかった。取りあえず珍しそうだ、ということで宮崎さんに教えていただいた「ウスヒメワラビ」という種名を念仏のように唱えながら、その場で標本用にはさみ、持ち帰ったのである。

帰ってすぐ県レッドデータブック(勝山ほか, 2006)をめくると、絶滅危惧 I A 類で、現存する確実な産地は小田原市根府川の 1ヶ所とのこと。過去の標本も、1959年に津久井町姫次の 1ヶ所からしか採集されていない。これは大変なことと慌てて本稿に取りかかった。

本種はイワデンダ科の夏緑性の中型シダで、紫がかった繊細な羽軸と、細かく切れ込んだ小羽片、芥子粒のように小さな孢子囊群が印象的だった。

標本：相模原市緑区沢井(標高約 370m) 秋山幸也 2010.9.15 SCM43866.

引用文献

勝山輝男・田中徳久・木場英久・神奈川県植物誌調査会編, 2006. 維管束植物. 高桑正敏・勝山輝男・木場英久編, 神奈川県レッドデータ生物調査報告書 2006, pp.37-130. 神奈川県立生命の星・地球博物館, 小田原.

ガクナンというランを見た

(秋山幸也)

2010年9月下旬, 津久井城山(小仏城山や旧津久井郡城山町と区別するために私たちはこ

う呼んでいるが、地元では単に城山と呼ぶ)の守人として、ここを庭のように歩き回っている永井充さんから、見慣れないランが咲いていると連絡が入った。相模原植物調査会の定例の野外調査日でもあった9月29日、同じく守人である鹿島敏夫さん、後藤裕子さんの案内で城山へ向かった。アラカシが優占する樹林の林床に、そのランはひっそりと2株が咲いていた。開花していない株が1株あったが、周囲を見回してもこの3株以外には見られなかった。

はじめ、シュスラン *Goodyera velutina* Maxim. かと思ったが、シュスランにしては花序も背丈もやや大きく、葉が明るい緑色で、裏面に紫色味もない。かと言って、葉の上面にはミヤマウズラのような網目模様も無い。その場で同行の人たちと、一応「シュスランかなあ」と結論づけたものの、じっくりしないまま下山した。採集して詳細に検討したかったが、もしシュスランだとしたら絶滅危惧 I A 類であり(勝山ほか, 2006)、株数も少なかったため、その場では採集はしなかったのである。

しかし、やっぱり写真だけではどうにも判断がつかず、後日結局、永井さんに1株の地上部を採集して来ていただいた。よくよく葉を見ると、うっすら網目模様が出ている部分もある。相模原植物調査会のメンバーと「ミヤマウズラとシュスラ



ガクナン (相模原市緑区津久井城山 2010年9月29日 秋山幸也 撮影)。

ンの中間的な形態だな」と話し合っていたところ、藤井良造さんが一言「ガクナンでしょう」とのこと。藤井さんは今年度から入会されたものの、怒濤の勢いで丹沢山地を歩き、幅広い知見と膨大な生育情報をお持ちの方である。初耳のその名をインターネットで検索してみると、ぴったり同じ特徴の写真がいくつも上がってきた。

ガクナンは漢字では“岳南”と記し、富岳（富士山）の南側の静岡県で最初に気づかれたことによる（菱山，2001）。シュスランとミヤマウズラの自然交配雑種由来ではないかとされているが、まだ分子生物学的に検討されているわけではなさそうである。いずれにせよ、正式に記載されていないため、学名も定かではない。西日本では極端に珍しくはないそうだが、関東地方ではほとんど認識されていない。1990年代に高尾山で確認され、その後も散発的に発生して話題になっているそうである（菱山氏 私信）。今後、注意して見ていきたいもののひとつである。

標本：相模原市緑区（標高約 300m）永井充
2010.10.23 SCM44376.

引用文献

- 菱山忠三郎，2001. 高尾山，花と木の図鑑．231pp. 主婦の友社，東京．
勝山輝男・田中徳久・木場英久・神奈川県植物物事調査会編，2006. 維管束植物．高桑正敏・勝山輝男・木場英久編，神奈川県レッドデータ生物調査報告書 2006. pp.37-130. 神奈川県立生命の星・地球博物館，小田原．

栄区・戸塚区でヤセウツボを記録 (林 辰雄)

2010年6月25日、横浜市の柏尾川でヤセウツボ *Orobanche minor* Sm. を見つけたので報告する。

場所は柏尾川にかかる高嶋橋の少し上流の川の右岸側（戸塚区）と左岸側（栄区）で、花の最盛期は過ぎていたが、コンクリートブロックの間にある僅かな土の中に数本が見られた。

近くにはシロツメクサは見当たらず、どちらもヨモギが近くにあったので、宿主はヨモギと思われる。ヤセウツボは、今、分布を広げている植物なので、今まで記録のなかった戸塚区や栄区でも見られるようになり、これからも多くの場所で見



ヤセウツボ（横浜市柏尾川 2010年
6月25日 林辰雄撮影）。

られるようになると思われる。

なお、以前、戸塚駅近くの吉倉橋の下で見られたヒロハノレンリソウは今はなくなってしまったが、ヤセウツボの近くで花をつけた株が見られた。

ミズユキノシタの再発見

(勝山輝男)

ミズユキノシタ *Ludwigia ovalis* Miq. はアカバナ科チョウジタデ属の多年草で、『神奈川県レッドデータ生物報告書 2006』では絶滅と判定されていたが、2010年9月15日に調査会会員の神田理雄さんが葉山町の水田に生育しているのを見つけられた。2010年10月24日、同じく会員の中山博子さんに案内してもらい、現地を確認したので、報告する。生育地は、小さな谷の小規模な水田で、ミズユキノシタは水田内や周囲の溝中に広がって生育していた。水田の所有者にお聞きしたところ、年1回は除草剤をまいているそうで、生えている植物も比較的除草剤に強いもので、アメリカアゼナ、チョウジタデ、コナギ、ノミノフスマ、タカサブロウ（モトタカサブロウ）、ヒデリコ、イボクサなどであった。

ミズユキノシタは、『神奈川県植物誌』（神奈川県博物館協会編，1958）に鎌倉、茅ヶ崎、厚木、平塚の記録が、『横浜植物誌』（出口，1968）に上白根大池、桐ヶ作大池の記録があるが、その後は、『神奈川県植物誌 1988』の調

査時に横浜市中区三溪園内の池で採集されただけであった。アメリカミズユキノシタ *L. repens* J. R. Forst と同様にアクアリウム植物として栽培されることがあり、栽培していたものが投げ込まれて繁殖するケースもあり、三溪園のものは『神奈川県植物誌 2001』では移入として扱われた。

今回、発見された葉山町のもは、水田内やその周辺の溝中に生育しており、水田耕作により定期的に攪乱される環境で、アクアリウムで栽培していたものをわざわざ投げ込むような場所とは思われない。鎌倉周辺には古い記録もあることから、以前から周辺の水田に生育していたものが残されていたと考えた方が自然であり、自生のものとして扱うこととし報告した。

ミズユキノシタは、葉は互生し、広卵形で長さ2～3cm、秋になると紅色を帯びる。花は小さく、径5mm以下で、花弁はなく4個の萼のみがある。

良く似たアメリカミズユキノシタは北アメリカ原産の帰化植物で、葉が対生することで区別でき、花には萼片より少し短い黄緑色の花弁がある。神奈川県では小田原市の飯泉取水堰で採集されている。

セイヨウミズユキノシタ *L. palustris* Ell. はヨーロッパ原産で、アメリカミズユキノシタと同様に葉が対生するが、花には花弁が無い。こちらは、今のところ神奈川県からの報告はない。

標本：三浦郡葉山町 神田理雄 2010.9.15 KPM-NA0137662.

相模川河川敷の水草の記録

(田中徳久・勝山輝男・大西 亘)

2010年9月25日、生命の星・地球博物館の観察会「莎草ウォッチング」が計画されていた。開催場所は、出水の頻度や雨の降り具合により莎草の出現状況が違うので、藤沢か相模川という曖昧(良く言えばフレキシブル)な計画とした。9月に入り、いよいよ参加者に集合場所などを連絡する必要に迫られ、著者のひとり「莎草ウォッチング」主担当の勝山が残暑厳しい中(まだ猛暑まったただ中)、候補地数ヶ所を下見に出かけ、海老名市中新田の相模川河川敷での開催となった。この下見の際、県内では希少な水草を観察、記録したので、標本を採集したものについて報告する。ただし、以下にも記すが、アサザやトチ

カガミは、移入の可能性が高いものと考えている。

アサザ *Nymphoides peltata* (S.G.Gmel.) Kuntze

『神奈川県植物目録』(松野重太郎編, 1933)は登戸と平塚、『神奈川県植物誌』(神奈川県博物館協会編, 1958)は産地記載なしに「稀」、『神奈川県植物誌 1988』(神奈川県植物誌調査会編, 1988)のための調査では採集されず、『神奈川県植物誌 2001』(神奈川県植物誌調査会編, 2001)のための調査では、川崎市宮前区初山と秦野市渋沢で採集されたが、前者は植えられたもの、後者も人為的に投げ込まれたものと扱われ、「公園の池やビオトープに植えられているのをみかける。現在、県内で確実に自然分布と思われるものはない」とされている。今回記録されたのは、河川敷に形成されたワンドが釣り堀化した場所であり、具体的に植栽された情報などはないが、これまでに記録がなかったこともあり、移入の可能性が高いと思われる。

標本：海老名市中新田 勝山輝男 2010.9.21 KPM-NA0137605.

トチカガミ *Hydrocharis dubia* (Blume) Backer

古くは『武蔵登戸附近植物目録』(帝国女子医学薬学専門学校, 1932)に記録があり、『神奈川県植物目録』(松野重太郎編, 1933)には産地の記載はないが掲載されており、『神奈川県植物誌』(神奈川県博物館協会編, 1958)には産地の記載なしに「池沼にやや普通」とあり、『神奈川県植物誌 1988』(神奈川県植物誌調査会編, 1988)のための調査では茅ヶ崎市だけで採集され、『神奈川県植物誌 2001』(神奈川県植物誌調査会編, 2001)のための調査では採集されなかった。過去には横浜市、逗子市、座間市、茅ヶ崎市などで標本が採集され



アサザ(海老名市中新田相模川河川敷 2010年9月21日 勝山輝男 撮影)。



トチカガミ (海老名市中新田相模川河川敷 2010年9月21日 勝山輝男 撮影)。

ている。今回記録されたのは、アサザ同様、河川敷に形成されたワンドが釣り堀化した場所である。1906年に有馬村社家(海老名市)で採集された標本が厚木市郷土資料館に残されており(ACM31114)、100年振りの採集の可能性もあるが、アサザ同様、現地の環境、様子から移入された可能性が高いと思われる。

標本：海老名市中新田 勝山輝男 2010.9.21
KPM-NA0137606.

ハゴロモモ *Cabomba caroliniana* A.Gray

日本には、昭和初期に移入されたと言われる帰化植物で、『神奈川県植物誌 2001』(神奈川県植物誌調査会編, 2001)では、「茅ヶ崎市と綾瀬市で記録されたが、一時的な逸出の可能性が高い」とされている。今回記録されたものも、現地の環境、様子から、自然に分布を広げたものではなく、人為的に移入された可能性が高い。

標本：海老名市中新田 勝山輝男 2010.9.21
KPM-NA0137607.

リュウノヒゲモ *Potamogeton pectinatus* L.

県内では、『座間市の植物』(座間市教育委



ハゴロモモ (海老名市中新田相模川河川敷 2010年9月21日 勝山輝男 撮影)。

員会, 1983) や『神奈川県植物誌 1988』(神奈川県植物誌調査会編, 1988) で初めて記録され、横須賀市と相模川中～下流域で採集され、『神奈川県植物誌 2001』(神奈川県植物誌調査会編, 2001) の調査では、茅ヶ崎市や横浜市でも採集された。今回は、釣り堀施設の敷設されていないワンドで記録され、自生のものの可能性が高い。

標本：海老名市中新田 勝山輝男 2010.9.25
KPM-NA0137608.

ミズキンバイ柏尾川に復活

(林 辰雄)

柏尾川の洪水対策としての川底の掘り下げ工事のため、ミズキンバイ *Ludwigia peploides* (Kunth) Raven subsp. *stipulacea* (Ohwi) Raven が一時、金井遊水池に仮植えされていたことは、FLORA KANAGAWA No.67 で報じたが、2008年に工事も終了、ミズキンバイも柏尾川に戻され、全盛期と同じように美しい花が見られるようになった。

保護のいきさつは、河川工事に先駆けての工事を請け負った造園業者の事前調査で、神奈川県では稀少なミズキンバイの存在が分かり、戸塚区の協力もあって、保護が計画されたようだ。

土が流れないように川の中の岸寄りに杭を打ち、島状に土を盛り、ミズキンバイを植えたもので、現在、元町橋(戸塚区吉田町)から、下流の金井公園(栄区金井町)までの間の7カ所にミズキンバイが植えられ、遊水池近くの土砂が自然に堆積した所にもミズキンバイの生育が見られる。

高嶋橋の少し上流の、植栽した所をみると、水中に根をおろしたミズキンバイは、それだけの群落で広がって生育は順調だが、土の中から伸びたミズキンバイは、他の多くの植物に埋もれる



ミズキンバイ (横浜市柏尾川 2010年6月25日 林辰雄 撮影)。

ような環境にあり、メリケンガヤツリとキシユウスズメノヒエが優占し、オオブタクサやオオイヌタデ、ホウキギク、コガマ、コセンダングサ、ホシアサガオ、ミヅソバ、マコモ、ヨシ、ジュズダマなどが混生して、放置しておけば、これらの植物に被われてしまいうそうである。しかし、「ミズキンバイを守るための会」

もできて、毎月1回、ボランティアが定期的に草刈を行っており、保護活動が順調に機能すれば、ミズキンバイの前途は明るいと思う。

ミズキンバイの花期は6月から9月で、6月下旬から7月下旬くらいが最盛期なので、観察に出掛ける際は参考にして欲しい。

事務局より

浜口哲一さんの追悼シンポジウム開催のお知らせ

本会の運営委員でこの5月に亡くなられた浜口哲一さんが提唱し、実践した市民による自然調べの成果と意義を再確認し、それを後世に継承していくためのシンポジウムが開催されます。本会からも、花ごよみ調査について佐藤恭子さんが講演されます。お誘い合わせの上ぜひご来場ください。

シンポジウム「生きもの地図を未来へ

～浜口哲一さんの足跡と、これからの道～

日時:2010年11月27日(土)13時30分開演(17時終了予定)

場所:はまぎんホール ヴィアマール (JR根岸線桜木町下車 約5分)

定員:500名(先着順・事前申し込み不要)

参加費:無料

主催:日本野鳥の会神奈川

後援:神奈川県植物誌調査会ほか

講演:市民調査で地域の自然とくらしを引き継ぐ
(財)日本自然保護協会 開発法子)

観察記録を重視した野鳥の目録づくり(日本野鳥の会神奈川 平田寛重)

マイフィールドに開眼した花ごよみ調査(神奈川県植物誌調査会 佐藤恭子)

最後の教え子が語る浜口研究室(神奈川大学 森啓太)

トコロジストはアマチュアの最高の喜び(こまたん 田端裕)

まとめにかえて一生きもの地図を未来へ(相模原市立博物館 秋山幸也)

連絡先:日本野鳥の会神奈川 電話 045-453-3301(月・水・金の12時～16時)または GZH02213@nifty.ne.jp(石井隆)まで

なお18時(予定)から2時間程度の交流会も予定しています。

場所:「ベイブリッジカフェテリア」パシフィコ横浜会議棟6階(みなとみらい線みなとみらい駅

から徒歩5分)

会費:5000円

振込先:銀行名 横浜銀行中野支店

口座番号 普通 6004143

口座名「浜口哲一さんを送る会」

締切:11月8日

※本号が皆さまのお手元に届くのは、交流会参加締切の8日を過ぎていると思われます。参加を希望される方は受付の可否について、実行委員会の青木雄司さん(wood-mouse@bear.odn.ne.jp)までご確認ください。

企画展「日本最初の植物同好会—横浜植物会の100年—」のご案内

生命の星・地球博物館では、表記の企画展を2010年12月11日(土)～2011年2月27日(日)まで開催します(観覧料は無料)。

横浜植物会は1909年に設立された日本最初の植物同好会として知られ、昨年創立100周年を迎えました。この企画展では、ハコネグミやアシタカジャコウソウなど、横浜植物会にゆかりの植物の標本を中心に、写真や書簡、書籍で植物会の歴史を紹介します。ぜひ、ご覧ください。

編集後記

前号の公約どおり“秋の発行”を実現し、さらにカラー化。ここまで来たら、数年振りの年3回発行を目指し、2月に次号を…と思っています。とはいえ、原稿がなければ発行できませんので、よろしく願います(特にカラーの写真入り)。

(田中徳久)

神奈川県植物誌調査会

〒250-0031 小田原市入生田 499

神奈川県立生命の星・地球博物館内

TEL 0465-21-1515・FAX 0465-23-8846

e-mail kana-syoku@nh.kanagawa-museum.jp

郵便振替 00230-5-10195

加入者名 神奈川県植物誌調査会

年会費 2,000円